

戦争体験談

齊藤 美代子 91 歳

私は、疎開先の三田（それまでは大阪の十三に住んでいました）で、小学6年生の時に終戦になりました。その直前までは、爆弾の恐ろしさの続く日々でした。

終戦と云う言葉をラジオから流れた時、日本が敗けたと云う悲しみより、家族が電氣をつけて笑えると思うとほっとしました。でも母は泣いていました。戦争は人の心をむしばみ、意味のないことだと思い、大人になったらこの痛みを生かして戦争の無い平和な世界に力を注いでいこうと決めました。

疎開先での爆弾、B29、防空壕、防空頭布の思い出は今も頭から抜けません。

また、兄が出征する時の悲しみ、みかん箱の上に立ち、近所の人々に見送られる姿を見て、妹の私としては死を覚悟をして見送りました。それから暫くして、伊丹にある陸軍の千僧兵営に配属された兄に面会に行くと、上司の命令に従い、靴ずれのため足をひきずり、泣きながら歩いている兄がいました。その後、兄は目が悪くなり兵隊として役に立たない人間となり除隊され哀れな姿で帰ってきました。

「ああ、よかったね」と私は兄を抱きしめました。近所の知人は特攻隊で飛行機にのろうとしたが、飛行機が故障して助かったと聞きました。お国のために命を捧げないと駄目な人間と云われていましたが、命の尊さが私には国を大切にすることだと信じていました。命あってこそ。

戦後、川西の花屋敷に住居を構えることになりました。近所の大きな家にはアメリカ進駐軍が占領して住んでいました。そこで、よくバナナを食べているアメリカ人を見かけました。私も食べたいと思いました。でもなぜかバナナは家にはありませんでした。

その後も兄は母の世話をよくしてくれ、私は安心して生活出来ました。兄の息子たちも立派に成人し世の中で活躍しています。現在、私は川西で、さやかコーラスに参加させてもらっています。やなせたかしさん作詞の悲しい、さみしい曲をうたっています。戦地へ行き、命を絶たれた方、残された人々の悲しみが伝わってきます。戦争の悲しみは、現在も続いています。心の傷跡は消えることはありません。この悲しみをパワーに変えて、平和な世界でありたいと祈り続けています。

卒寿を越えた今も「長崎の鐘」藤山一郎さんのうたわれた曲を下手ですがピアノで弾きながら、平和の鳩を飛ばしています。